1 第1437号（昭和63年3月14日第3種郵便物認可）© 環境新聞社 2021

金曜日発行 週刊

シルバー新報

2021年（令和3年）2月12日（金曜日）

介護の文化を創る専門紙

年間購読料 21,000円（税別）

発行所：環境新聞社 東京都新宿区四谷3-1-3（第一富澤ビル） 電話03（3359）5372
大阪市中央区久太郎町3-1-15（メビウスビル） 電話06（6252）5895

目次

後期高齢者2割負担導入の法案提出…2面
介護保険は大胆な改革を……3面
在宅医療連携拠点で改善策を共有……4面
1人1分の短縮でも業務改善効果に…6面

重度化対応を強化

相談支援の基本報酬底上げも

厚労省 障害福祉サ

厚生労働省は4日、2021年度のビスごとの報酬を決めた。全体の改定き障害者の重度化・高齢化、新たに感画相談支援については小規模事業所の業所加算の基本報酬への組み込み等に障害者のグループホームからの地域移見込み。3月下旬までに関連告示をす

グループホームにおける重度障害者の受け入れを評価する重度障害者支援加算について、「重度障害者支援加算（Ⅱ）」180単位／日を新設し、障害支援区分4以上の強度行動障害のある人を算定対象に加える。強度行動障害のある人がGHの体験利用を行う場合に、所定の研修修了者を配置するGHを評価する「強度行動障害者体験利用加算」400単位／日も新設する。

他の類型より世話人配置の手厚い日中サービス支援型グループホームの基本報酬については、重度障害者の受け入れにインセンティブが働くよう、メリハリのある報酬体系に見直す。世話人を3：1以上配置する場合の日中サー共同生活援助（Ⅰ）に関して援区分4以上基本報酬を1つ引き上げる分3は71単位下げを行う。

計画相談支酬についての相談支援専数が2名以下事業所の基本報引き上げ②特算に相当するみ込み③常勤支援専門員区分の創設区分の創設—

計画相談支援 改定後の段階別基本報酬単価

報酬区分	常勤専従の相談支援専門員数	サービス利用支援費		
		現行	報酬引き上げ	特定事業所加算の組込み後
機能強化（Ⅰ）	4名以上	1,462単位	1,464単位	1,864単位
機能強化（Ⅱ）	3名以上			1,764単位
機能強化（Ⅲ）	2名以上			1,672単位
機能強化（Ⅳ）	1名以上		1,522単位	1,622単位
機能強化なし				1,522単位

世話人配置の手厚い日中サービス支援型グループホームの基本報酬については、重度障害者の受け入れにインセンティブが働くよう、メリハリのある報酬体系に見直す。世話人を3：1以上配置する場

断別の体系と手経営実態が厳事業所の収支の組み込みに続き負担軽減職員の配置促

結果的に表現行146「サービス利（Ⅰ）」（機能は1522単位される。常勤1～4名以上合には「機能

私の医療・介護物語 ㊹

株式会社カラーズ代表取締役

田尻 久美子 氏(3)

父母の介護や自分の育児 各世代の困難解決の支援を

会社運営と3人の幼い子どもの育児で目の回るような日々を過ごす中、また一つ家族に重大な出来事が起きました。父の肺がん発覚です。勤め先の定期健診で肺に影が見つかったときには肺がんステージ3。医師からは平均的な余命が1年半だと伝えられました。そのとき私は0歳6か月の双子と2歳の長女を抱えた育児真っただ中。こうも色々なことが重なるものかと、天を仰ぐような気持ちでした。

2年を過ぎた頃、抗がん剤が効かなくなりさすがに父の弱り方も顕著になっていました。「家で最期まで過ごしたい。お前は介護の仕事をしているからお前に任せる」と、担当ケアマネジャーのような役割を任されました。それから父が亡くなるまでの数か月は、仕事と育児に終末期介護が加わり、職場と保育園と実家の間を自転車で一日中駆けずり回っていました。

介護認定の申請はしたものの、認定調査員の聞き取りが不快でたまらず、認定調査翌日には認定申請を取り下げました。そこで自費サービスや訪問診療を中心とした生活を組み立てました。最期の数週間は子どもたちも含めた家族で実家に泊まり込む生活になりました。

父とは亡くなる前日まで話ができました。昏睡状態になってからは家族でベッドを囲み夜通し父との思い出を語り、翌日息を引きとるまでずっと側にいることができました。

子どもたちも、大好きなじいじが徐々に衰弱し、そして死にゆくさまを生活の中で見届けました。父が「生きること、そして死ぬこと」を孫たちに教えてくれたのだと思いました。

父の看取りを通じて、在宅での終末期介護のリアルを経験することになりました。癌の終末期の場合、死の比較的直前になって急激なADL低下が起こるために、地域包括支援センターやケアマネジャーなどに繋がらず、苦労されているご家族も多いのではと感じました。

ダブルケア（介護、育児）の困難さも実感しました。自分自身の時間管理や生活のマネジメントにはそこそこ自信があったのですが、育児と介護は思うようにはいきません。子どもにも親にも、「想定外」に振り回される日々が続き、精神的にも肉体的にも辛くなる家族介護者の気持ちを痛感しました。

また、終末期には手際よいケア以上に、医療・介護職の誠実で真摯なふるまいと言葉がけが有難いのだと知りました。医療・介護従事者にとっては日常茶飯事でも、当事者にとってはそうではありません。悪い意味での「慣れ」がないように、その人とその人を大切に思う家族に対して、真摯に向き合うべきだと改めて感じました。

母の闘病や父の看取り、育児などを通じ、高齢者だけでなく、それぞれの世代、個々のライフステージにより異なる生活の困難さがあることを知りました。そんな状況を少しでもサポートできたらという考えが、いまのカラーズの事業につながっています。

「自分の親や大切な人にお勧めしたくなる品質のサービス」をモットーに、これからも様々な方の生活を真摯にサポートしていきたいです。

（終わり）

介護労働をテーマに講演する著者（左端）